

Vol. 233 君津製鐵所第二高炉に火が入る 火入れ式に参列して（平成 24 年 6 月 12 日）

去る5月28日改修工事が進められていた君津製鐵所第二高炉が完成して藤野所長及び製鐵所々員、浜田、中後衆議院議員、君津四市の市長、県議、市議会代表、自治会、産業経済団体を代表する150名余りの人達が参列されて火入れ式が行われました。

火入れ式は階段を50段位昇った高炉鑄床は轟々たる風の音の様な重低音の響き渡る緊迫感でした。

「火入れの儀」は宮崎神宮親子によって行われました。神事が終わりますと燧石によって火口（ほぐち）に点火され、松明によって祭壇の炭釜の中の炭に火が移され、やがて炭火になった火種を十能で藤野所長を先頭に浜田、中後衆議院議員、鈴木市長さんら38名の方々が銀色に輝く新しい38の羽口へと火種が送り込み藤野所長の「第二高炉送風開始」の号令と共に打ち鳴らされた鐘の音に大拍手が挙がり火入れ式は無事に終わりました。東日本大震災による釜石製鐵所の大惨事の痛手からの復旧作業も終わり、高炉休止などの困難を乗り越えての第二高炉の完成はまさに快挙でありました。

火入れ式が終って本館ゲストホールで行われた直会（なおりい）の席上、藤野所長は「1月18日から工事をスタート5月26日に完工した。今回の拡大改修工事は炉容積を37%拡大3,273立方メートルから約4,500立方メートルにした、最先端技術を駆使して居るので、炉の長寿命化、生産能力向上が期待できます。総工費は凡400億円」と挨拶をされました。振り返って見ますと君津製鐵所が昭和39年始動した頃は粗鋼生産世界一は米USスチールで戦後に財閥解体された八幡は4位、富士製鉄は5位であり、鉄鋼市場は低迷していました。この時、後世に名社長と名を残された八幡稲山社長、富士水野社長は合併して巨大企業を作ろうと決心執念を燃し続けて新日鐵を誕生させました。粗鋼生産世界一、売上高日本一の製鋼業界で強力なリーダーシップを発揮して過当競争を防ぎ、日本の高度成長への大きな足がかりを作ったのでありました。

その後鉄鋼業界はご多分に漏れず経済好不況の幾度の荒波をかぶって参りましたが新日鐵の古老達は「あの時合併していなかったら日本の鉄鋼業界は大変なことになっていた」と語られて居ります。まさに先見の明があったからであり、4市合併もこの岐路にさしかかって居り先見性あるリーダーの出現を望まれるときであります。昭和45年合併以来新日本製鐵となり世界最大の鉄鋼メーカーになりましたが、ここ数年来は世界各地の鉄鋼メーカーを買収拡大して来たインドのアルセロールミタルや急成長を続ける中国大手に追い抜かれましたがこの10月には住友金属工業と合併することによって世界二位に浮上します。中国一国だけが大膨張を続けたこの10年の中国も峠をこえて、世界の新市場と中国の二つに大きく変わる世界の鉄鋼市場に次の飛躍のチャンスを迎えてわが新日鐵は守りから攻めへと大きく方向をかえて再び世界のリーダーを目指してくれるだろうと大きな期待を特にさせられた火入れ式でありました。